



2010年7月21日放送

領域別入門漢方医学シリーズ

緩和医療と漢方医学

癌研有明病院 消化器内科部長・総合内科部長 星野 恵津夫

(4) 外科的治療と放射線治療の合併症の漢方治療

1) <イントロ>

現在のがん治療の3つの柱は、手術、放射線治療、ホルモン療法を含む化学療法です。近年の西洋医学による診断学の進歩により、がん患者の病態把握が正確に行われるようになりました。その結果、これらの3大治療法を組み合わせた集学的治療が行われ、各領域の専門医が共同してひとりの患者の治療にあたるのが可能となりました。

今回と次回の2回にわたって、癌の3大治療に伴う合併症の漢方治療について、症例を挙げて解説します。今回は、外科手術と放射線治療に伴う合併症についてお話しします。

A) <外科手術の合併症>

外科手術は癌を機械的に切除する治療ですが、外科的治療の合併症は、少なくありません。近年安全で侵襲の少ない鏡視下手術や内視鏡治療などの治療方法が開発されて、重大な合併症は減少しましたが、それでも術後に患者が苦しみ、担当医を悩ませる合併症はよく起こります。外科から漢方サポート外来に紹介された術後の患者の例を挙げると、(1)

腹部手術後の腹痛や便通異常、（２）上部消化管手術後の通過障害（しゃっくり、食欲不振、体重減少）、（３）大腸や骨盤内臓器の手術後の腸閉塞、（４）転移性肝癌の大量肝切除術後の肝不全、（５）肺癌術後の胸壁の痛み、などがあります。

順に症例を挙げて、ご説明いたします。

（１）腹部の手術後の腹痛や便通異常に対して、第一に投与すべき漢方薬は「補中益気湯」です。補中益気湯は、腹部手術後の患者の食欲不振・不眠・下痢・便秘・腹痛などの様々な愁訴を改善し、栄養状態を改善させることによって、手術後の気力と体力を回復するための「補剤」として用いられる、極めて応用範囲の広い漢方薬です。

特に腹部手術後の愁訴には、とりあえず併用してよい便利な漢方薬です。抗生物質、抗コリン薬、医療用麻薬、胃腸運動改善薬、消化酵素製剤、胆汁酸吸着薬など、様々な新薬に併用して、「補中益気湯」を用います。

（２）胃癌や食道癌の手術後の吻合部通過障害に対しては、術後早期であれば、多くの場合「茯苓飲プラス補中益気湯」が有効です。服用開始数日後にはしゃっくりや胃のつかえ感が軽快し、食欲が出てきます。吻合部の浮腫が消退し、通過障害は改善して、通常 10 日前後で退院ができます。

症例は 66 歳の男性です。進行胃癌に対する胃亜全摘術を受けた後に、しゃっくり、嘔気、嘔吐、腹部膨満が出現しました。胃管を挿入し、胃排出促進薬を投与しましたが無効のため、手術後 3 週間目に紹介されました。

補中益気湯と茯苓飲を服用した翌日に、しゃっくり、嘔気、嘔吐が軽快し、5 日目には 3 分粥が摂取でき、具合がよいと笑顔がみられ、10 日目に退院できました。

一方、術後長期間にわたって上腹部膨満感と食欲不振が続き、体重が減り続けるような場合は、他の漢方薬が必要となります。このような状態に対してはしばしば大柴胡湯プラス半夏厚朴湯など、実証の漢方薬が必要な場合が多くなります。

（３）大腸癌や、婦人科・泌尿器科疾患など、骨盤内腫瘍の術後の癒着性イレウスに対しては、通常大建中湯が用いられます。しかし、術後の気力体力の低下を考慮し、自律神経を調整する作用の強い補剤である補中益気湯を加えて「大建中湯プラス補中益気湯」とする方が、治療効果は高まります。

症例は 78 歳の男性です。12 年前に胃癌で胃亜全摘術を受けています。前立腺癌の診断でホルモン療法をうけていましたが、無効となったため、化学療法を行うため、入院しました。抗癌剤の投与後 2 日目に、癒着性イレウスを発症し、紹介されました。通常はイレウス管を挿入して消化管内の減圧をはかり、イレウスの解除を待つのですが、患者さんがイレウス管挿入をいやがったため、漢方治療を行うことにしました。大建中湯 2 包と補中益気湯 1 包を合わせて 1 日 3 回経口投与し、グリセリン浣腸を 1 日 2 回行いました。その結

果、治療開始翌日には排便と排ガスがあり、腹部膨満は軽快し、イレウス管を用いずにイレウスは改善し、一旦退院することができました。

ところが大建中湯は、胃や食道など上部消化管の手術後間もない患者に投与すると、上腹部の不快感、嘔吐、食欲不振などをひき起こし、患者に苦痛を与えることが少なくありません。大建中湯は下部消化管の蠕動運動を亢進させますが、上部消化管の蠕動運動は抑制するため、胃癌など上部消化管の手術後の患者への投与は慎重に行うべきです。

症例は62歳の男性です。胃癌の診断で胃全摘術を受けた後、術後の癒着性イレウスを予防する目的で大建中湯の投与が開始されました。手術の3ヶ月後から毎食後に心窩部の痛みを訴えるようになり、漢方サポート外来に紹介されました。直ちに大建中湯を中止し、芍薬甘草湯に附子末を併用し、牛車腎気丸を眠前に投与したところ、腹痛はなくなり、体調は良くなりました。

(4) 転移性肝癌に対する広汎肝切除術後の肝不全に、茵陳蒿湯が有効な場合があります。

症例は57歳の男性です。S状結腸の進行癌と、最大径12センチメートルまでの多発肝転移の診断で、左半結腸切除術、および肝の拡大右葉切除術を受けました。術後肝不全の状態となり、黄疸、胸腹水、浮腫などがみられました。週に1-2回の血漿交換、アルブミンの連日投与、分岐鎖アミノ酸製剤の投与などを行いました。しかし肝不全は悪化の一途をたどり、術後2ヶ月後に総ビリルビンは11 mg/dlを超えたため、漢方サポート外来に紹介されました。

茵陳蒿湯の投与を開始した時点から黄疸は改善し始め、1ヶ月後には総ビリルビン値は6 mg/dlまで減少し、アルブミンを補充する必要がなくなりました。持続する浮腫と腹水は五苓散を併用投与した結果改善し、その後約1ヶ月で患者さんは退院することができました。

茵陳蒿湯は、利胆作用と肝の繊維化抑制作用があり、肝における蛋白合成能を促進させると報告されていますが、本患者の症状改善の機序はそのように考えられます。

(5) 肺癌の術後には、肋間神経の損傷に関係すると考えられる、痛みや不快感が長期間続く場合がありますが、このような症状には漢方薬が有効です。

症例は65歳女性です。4年前に左肺癌の手術を受けましたが、1年前に母親が死亡したのをきっかけに、便秘、耳鳴り、不眠などに伴って、手術の瘢痕のある左側胸部に重苦しい痛みが出現し、通常の鎮痛薬が無効のため、漢方サポート外来に紹介されました。

患者さんは毎日午後3時頃から寝るまで、術後の左肋骨の部分に鉄板が入っているような、重苦しい圧迫感を自覚し、起きていられないと訴えます。

補中益気湯3包と牛車腎気丸1包を投与したところ、耳鳴りがなくなり、快便となり、元気がでて、胸部の重苦しい不快感は軽快し、横になる必要もなくなりました。

B) <放射線治療の合併症>

次に、放射線治療の合併症として、（１）放射線皮膚炎、（２）頭頸部の放射線治療後の唾液分泌障害、および（３）放射線直腸炎、の漢方治療についてお話しします。

（１）放射線による皮膚の炎症に対しては、「紫雲膏」が有用です。これは、江戸時代の外科医、華岡青洲先生の創薬された、火傷やしもやけなど皮膚の炎症に有用な軟膏であり、現在健康保険が適用される唯一の外用薬です。放射線皮膚炎は皮膚の熱傷と同様の熱エネルギーによる皮膚損傷ですので、有効と考え用いたところ、ピリピリ、チクチクする痛みの緩和に極めて有用であることが確認できました。

症例は46歳の女性です。2年前から左乳房の腫瘍が増大し始め、1年前に当院乳腺科受診しました。粘液癌で手術不能と診断され、放射線治療が行われました。照射部の熱傷による痛みとだるさが強いため、追加治療としての化学療法を拒絶し、漢方サポート外来を受診しました。放射線照射部の腫脹と痛み、微熱、全身倦怠感、食欲不振、冷え、夜間尿を訴えました。（補中益気湯1包と当帰芍薬散1包）を3回と、牛車腎気丸2包を1回投与し、照射部位に「紫雲膏」を塗布したところ、照射部の痛みと微熱はなくなり、3週間後には食欲がでて、体力が回復し、全身倦怠感と肩こりが軽快しました。現在まで紫雲膏の塗布と漢方薬の服薬を続けていますが、乳癌はほぼ平坦化し、皮膚の欠損部分はほぼ上皮化しました。

（２）頭頸部癌の放射線治療後の唾液分泌障害による口腔乾燥には、麦門冬湯を基本とし、体質に応じた漢方薬を併用するのが有用です。

症例は56歳の女性です。中咽頭癌の4期と診断され、放射線治療60グレイと化学療法を3コース受けました。その後、口腔乾燥がみられ、歯周病や齲歯をくり返したため、歯科に通院していました。歯科の担当医から1年間十全大補湯を投与されましたが、効果なく、手術の2年後に漢方サポート外来に紹介されました。

口内乾燥感が強く、兎糞便で時々下痢し、夜間の頻尿がありました。麦門冬湯と桂枝茯苓丸に加え、就寝前に牛車腎気丸を服用すると、3週間後には唾液が出て、ポテトチップスが食べられるようになりました。2ヶ月後には口の中に唾液がたまるようになり、夜中のペットボトルが不要となり、パンが食べられるようになりました。便秘も快便となり、抑うつ状態だったのがうそのように快活になり、体重も44kgから47kgに増えました。

（３）放射線直腸炎による便秘異常に対しては「補中益気湯」が有効な場合があります。

症例は73歳の男性です。早期直腸癌と診断され、ある大学病院で内視鏡による粘膜切除術を受けました。しかし、その後の経過観察中に、直腸に癌の遺残が確認されたため、放射線化学療法を受けました。その後は便意があるとすぐ排便するようになり、通勤中に失禁することもしばしばあり、おむつをはいて生活していました。3年後に当院消化器内科を受診し、放射線直腸炎の診断で薬物療法を受けましたが、効果がみられないため、漢方

サポート外来に紹介されました。

補中益気湯を3回と、牛車腎気丸1包を就眠前1回投与したところ、食欲が出て、体調がよくなり、便も有形便となって、失禁することもなくなりました。

<おわりに>

本日は癌の治療法のうち外科治療と放射線治療を取り上げ、治療に伴う副作用や後遺症に対して、漢方薬がどのように役立てたらよいかについて、症例を挙げてお話をしました。

手術や放射線治療により癌はコントロールできても、その後に苦痛が長期間持続し、QOLが低下すれば、治療は成功したとは言えません。臨床医としての仕事は、治療後に患者が本来の健康な状態に回復して始めて、成功したと言えるのです。

現代の最先端の西洋医学による治療を、伝統的漢方医学でサポートすることによって、患者のために真に有用な治療のシステムが出来上がることが期待されます。